

Title	戦乱と物価
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.7 (1914. 9) ,p.823(43)- 843(63)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140910-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140910-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯の如きは最早や最惠國待遇なるものに非ざるなり。此故に多くの無條件條款中に『總て最惠國の基礎に置くの意思なるに因り』と規定するものは之を第三國と同等の地位に置くの意思と解釋せざる可からず。第三國と同等の地位に置くの意思ならんには第三國が報償を提供して許與せられたる利益を對手國が『即時無條件』にて之に均霑せんとするは明に『最惠國の基礎に置くの意思』と相容れざるものと云はざるを得ざる可し。是れ余が無條件條款中に『最惠國の基礎に置くの意思云々』の文字は後出の『即時無條件にて云々』の文字の意味を大半減殺すと云ふ所以にして又余が無條件條款は其用語に於て且つ其由來に於て絕對無償の規定と解釋することを得るか如くなるに拘はらず最惠國條款の本質上これを認むる能はざる所以なり

(1) Westlake : International Law, Part I, Peace, p. 283.

## 戦亂と物價

高城 仙次郎

### 一 緒 言

歴史の示す所に依れば戦争には物價騰貴の伴ふを常とす。殊に戦争後に於て最も甚だし。今や歐洲大亂の餘波が極東に迄及ぼし我國も遂に東洋永遠の平和の爲めに獨逸に對して干戈を動かさざるを得ざる羽目に陥りたる結果として東半球の全部は將さに戦争の卷と化し了らんとしつゝあり。従つて經濟界に及ぼす此世界的動亂の影響は頗る寒心に堪へざるものある可く、物價の變動も亦激甚となるに至るやも測られず。

千八百九十七年以來騰貴しつゝありし物價が最近數十ヶ月間に於て一頓挫を來たしたるが如き觀ありしに、又もや茲に暴騰の兆を生ずるに至りたるぞ是非な

けれ九十七年來の物價騰貴を誘致せる最大原因は金産額の増加なりしが、將さに發生せんとする騰貴の原因は勿論世界的戰亂なりとす。

物價の暴騰が生産消費企業、賃銀、各個人の實收入、富の分配等に及ぼす影響、殊に悪影響は人の知れるが如く頗る甚大なるものなれば、吾人は將さに來らんとする物價騰貴の趨勢を放任して袖手以て其の弊毒を蒙むるの愚を習はずして之に對する救済策を豫じめ講究す可きなり。

然りと雖も、此救済策を講ずる爲めには先づ吾人は戦争が如何なる徑路順序を通じて物價を騰貴せしむるに至るかを明かにせざる可からず。されば予は左に先づ冒頭戦争中に於ける物價騰貴の實例を挙げ、次に戦争と物價騰貴との關係を述べ、終りに我國の執る可き物價調節策に對する卑見の一端を開陳して稿を結び先覺の叱正を仰がんと欲す。

### 二 戦争と物價騰貴

予の寡聞の範圍内に於ては戦争が其持續中に於て若しくは其終局後に於て交戦國の物價を騰貴せしめざりしことなし、勿論其程度並に期間等は國に依り又同

一國に於ても戦争の時期繼續期間、結果等に依りて異なれり。今左に我國並に歐米諸強國の經驗を簡單に紹介せん。

日本

西南戦争が著しく物價を騰貴せしめたるは左表に明かなり。

年次	東京物價指數	年次	東京物價指數	年次	東京物價指數
明治六年	一〇〇、〇	九年	一〇一、九	十二年	一一三、二
七年	一〇二、九	十年	一〇四、七	十三年	一一三、九
八年	一〇五、七	十一年	一一〇、五	十四年	一一四、五

(東洋經濟新報第五百七十八號に據る)

右表に依れば、明治九年に於て一〇一、九なりし物價は十年に一〇四、七に騰貴し更に十一年には一一〇、五に暴騰し爾後年々騰貴し十四年に於て極點に達せり。尤も此物價騰貴の全部を戦争の罪に稼するは誤てり。如何となれば、物價は平時に於ても騰貴又は低落するものなればなり。されば前表に就きて之を論ずれば、明治六年より戦争の前年即ち明治九年に至る四年間に物價は約百分の二騰貴せり。即ち平均一ヶ年間の騰貴は千分の五なりとす。此常規的騰貴を前表より控除せば、明治

九年後の物價指數は左の如し

年次	物價指數	年次	物價指數
九年	一〇一・九	十二年	一二〇・六
十年	一〇四・二	十三年	一三七・四
十一年	一〇九・五	十四年	一四二・七

前表に就きて見るも吾人は尙ほ西南戦争の物價に及ぼしたる影響の著しきを認めざるを得ず。

日清戦争 次に物價に及ぼしたる日清戦争の影響は如何。左に掲ぐるは大藏省理財局編纂『金融事項参考書』掲載の日本銀行物價指數表なり。

年次	指數	年次	指數	年次	指數
二〇	一〇二	二四	一〇九	二八	一三五
二一	一〇七	二五	一一五	二九	一四五
二二	一一二	二六	一二九	三〇	一六一
二三	一二七	二七	一二六	三一	一七〇

前表に據れば、日清戦争の前年なる明治二十六年に於て一一九なりし物價指數は二十七年に於て一躍して一二六となり、翌年には一三五となり、爾後累年騰貴せ

り。されど、此騰貴も亦戦争以外の原因に依るものを含めるを以て、吾人は戦争前五ヶ年間に於ける物價平準を一〇〇となし且つ其五ヶ年間に於ける平均騰貴率を控除して明治二十七年以後に於ける指數を計出せるに左の結果を得たり。

年次	指數	年次	指數	年次	指數
二六	一〇〇	二七	一一二・〇	二九	一三〇
二七	一〇七・五	二八	一一八・五	三〇	一三五・五
二八	一一二・〇	二九	一二八・五	三一	一三五・五

前表は日清戦争が物價に及ぼせし影響の甚大なるを示して餘りありと云ふ可し。

日露戦争 次に日露戦争の誘致せし物價騰貴の程度を知る爲めに前と同一方法を用ゐて三十七年以後に於ける常規的騰貴を除外せる指數を求めたるに左の如き數字を得たり。

年次	指數	年次	指數	年次	指數
三六	一〇〇	三七	一一五・〇	三九	一二一・〇
三七	一〇六・五	三八	一二四・五	四〇	一二四・五
三八	一一一・〇	三九	一二八・五	四一	一二四・五

前表に就きて之を觀るに、物價に及ぼしたる日露戦役の影響は日清戦争の影響よりも稍輕微なりと雖も尙ほ頗る著しきものありと云はざる可からず。

米國

獨立戦争 獨立戦争の軍事費を調達するの目的を以て中央政府に於て發行せし紙幣は二億四千萬弗に上り各州政府に於て發行せしもの又約二億一千万弗に達せしかば、銀紙の間に開きを生じ、遂に國會の決議に依りて銀貨一弗に對する紙幣四十弗の比價を公認するに至れり。されば凡ての物價は奔騰して底止する所を知らざりしが如し。數例を擧ぐれば、小麦の如きは一斗三十四弗前後に騰貴し、珈琲一斤四弗、砂糖一斤三弗を稱ふるに至りしことありと。

南北戦争 千八百六十一年より六十五年に至る四ヶ年間に亘る南北戦争中に於ても物價は左の如く著しく騰貴せり。

年次	物價指數	年次	物價指數
一八六〇	一〇〇	一八六四	一七二
一八六一	九四	一八六五	二三二
一八六二	一〇四	一八六六	一八八
一八六三	一三二		

右表に示すが如き暴騰は戦争の如き非常事件に依るに非ざれば誘致せらるゝことなしと云ふを得べし。

米西戦争 千八百九十八年に勃發せる米西戦争は小規模にして且つ其繼續期間短かゝりしを以て獨立戦争又は南北戦争の如く物價に大なる影響を及ぼりしが如し。左に掲ぐるは合衆國勞働局の編纂に係る物價指數なり。(千八百九十年より千八百九十九年に至る十ヶ間の物價を百として計算せり)

年次	指數	年次	指數
一八九〇	一一二・九	一八九六	九〇・四
一八九一	一一一・七	一八九七	八九・七
一八九二	一〇六・一	一八九八	九三・四
一八九三	一〇五・六	一八九九	一〇一・七
一八九四	九六・一	一九〇〇	一一〇・五
一八九五	九三・六	一九〇一	一〇八・五

右表の示す所に據れば、米西戦争の起りし年を其前年即ち千八百九十七年に比較するに、物價は三分七厘の騰貴を示したり。されど、千八百九十七年は晩近に於ける世界的物價騰貴の初年なるを以て、其翌年即ち九十八年に於ける三分七厘の騰貴中少くとも其一部は之を金産額増加に基づく一般的原因に歸せざる可からず。



孰れにもせよ物價に及ぼしたる米西戦争の影響は輕微なりと云ふ可し。

英國

ナポレオン戦争 ナポレオン一世が歐洲大陸を風靡して英國を威嚇せし間は英國の物價は著しく騰貴せるが千八百十五年ナポレオン軍がウオールドールに大敗せし後同國の物價は頓に下落せり。左に示すは英國の經濟學者ジェゾンス氏の調査に係る物價指數表なり。(千七百八十年の物價を百とす)

年次	指數(金貨本位)	指數(紙幣本位)	年次	指數(金貨本位)	指數(紙幣本位)
一八〇一	一四〇	一五三	一八一	一三六	一四七
一八〇二	一一〇	一一九	一八二	一一一	一四八
一八〇三	一二五	一二八	一八三	一一五	一四九
一八〇四	一一九	一二二	一八四	一一四	一五三
一八〇五	一三二	一三六	一八五	一〇九	一三二
一八〇六	一三〇	一三三	一八六	九一	一〇九
一八〇七	一二九	一三二	一八七	一一七	一一〇
一八〇八	一四五	一四九	一八八	一一三	一一五
一八〇九	一五七	一六一	一八九	一一二	一一七
一八一〇	一四二	一六四	一八二〇	一〇三	一〇六

金貨を本位とするも將た又紙幣を本位するも物價が千八百十五年並に十六年に於て著しく下落せるはオポレオンの没落に因づくものにして前世紀初年に於ける歐洲の大亂が如何に英國の物價を激變せしめたるかを示して餘りあり。クリミア戦争。左に掲ぐるジェゾンス氏の指數に依れば英國の物價に及ぼしたるクリミア戦争の影響も頗る甚大なりしが如し。

年次	指數(金貨本位)	年次	指數(金貨本位)
一八四六	七四	一八五二	六五
一八四七	七八	一八五三	七四
一八四八	六八	一八五四	八三
一八四九	六四	一八五五	八〇
一八五〇	六四	一八五六	八二
一八五一	六六	一八五七	八五

千八百四十七年迄七〇臺を維持せし物價は四十八年に於て下落の傾向を示して六八となり、四十九年には更に下落して六十四となり爾後六四—六六の間を上下しつつありしにも係はらず、クリミア戦争の開始せられたる千八百五十三年に至りて俄然七四に暴騰し、其翌年更に八三に騰貴し、爾後其戦争の終局後に至る迄

八〇臺を維持せしは同戦争の影響と看做すことを得可し。

南阿戦争 次に英國物價に及ぼしたる南阿戦争の影響如何。倫敦イコノミスト誌編纂の物價指數中にて南阿戦争前後に相當する年度に係るものは左の如し。

年次	指數	年次	指數	年次	指數
一八九一	一〇一	一八九六	九一	一九〇一	九七
一八九二	九七	一八九七	八九	一九〇二	八九
一八九三	九六	一八九八	八六	一九〇三	九一
一八九四	九五	一八九九	八七	一九〇四	一〇〇
一八九五	八七	一九〇〇	九七・五	一九〇五	九七

南阿戦争は千八百九十九年十月十二日に始まり千九百〇二年五月三十一日迄繼續せしが英國が大部隊の遠征軍を送りしは千九百年なれば此戦争は事實同年を以て開始せられたりと云ふことを得可し。而して吾人は千八百九十九年に八七なりし物價が千九百年に於て九七・五に激騰せしを見るなり。其當時は前述の如く世界的物價騰貴の趨勢を有せしを以て、此暴騰は必ずしも南阿戦争のみの結果なりと云ふを得ざるも、同動亂が物價に多大の影響を及ぼしたることは否定す可からず。

佛國

革命戦争 十八世紀末葉に於ける佛國革命戦争中に巨萬の紙幣を濫發せる結果として當時物價の暴騰せしは有名なる事實にして茲に事新らしく紹介するの要なし。

普佛戦争 千八百七十年の普佛戦争中に於ては戦争の短かゝりしと且つ貨幣政策宜しきを得たるが爲めに物價は左して騰貴せざりしが、終局後に至りて暴騰せり。左に掲ぐる佛國物價指數表はイコノミスト指數と略ぼ同一の方法に依りて編纂せるものにして、第一行は單純なる物價の比例を示し、第二行は其表に編入せる各貨物の賣買量に依りて等差を施して計出せる指數なり。共に千八百六十五年より千八百六十九年に至る五ヶ年間の物價の平均を百とす。

年次	一八六五	一八六六	一八六七	一八六八	一八六九	一八七〇	一八七一	一八七二	一八七三
單式指數	一〇三	一〇五	一〇〇	九七	九五	九七	一〇四	一一一	一一〇
複式指數	一〇六	一〇八	九七	九六	九三	九一	一〇二	一〇五	九七

此兩様の指數は普佛戦争が其繼續中に於て物價に輕微なる影響を與ふるに過がざりしに千八百七十一年後に於ける物價が暴騰せるを示すの點に於て一致するを見る。

獨逸

獨逸帝國は建國後本年に至る迄大軍を動かしたることなし。されど普佛戦争は同帝國建設と密接の關係を有するものなるを以て、此戦争が獨逸の物價に及ぼしたる影響を觀るに、同戦争が佛國の物價に及ぼしたる影響に髣髴たるものあり。左に掲ぐる指數表は之を示せり。

年次	指數	年次	指數	年次	指數
一八六六	一二五・八五	一八六九	一二三・三八	一八七二	一三五・六二
一八六七	一二四・四四	一八七〇	一二二・八七	一八七三	一三八・二八
一八六八	一二一・九九	一八七一	一二七・〇三	一八七四	一三六・二〇

此外露伊の諸國に於ても戦争と物價との間に略同一の關係の存するものあるも頗はしければ之を省略せしが、以上簡單に記述せる所に依りて戦争が物價を騰貴せしむるものなるの事實は明かなるが如し。

三 戦時に於ける一般的物價騰貴の原因

上文に於て戦争が物價を騰貴せしむるの事實を指摘せしが、以下吾人は物價が如何なる徑路に依りて戦時中に於て騰貴するの傾向を有するに至るかを討究せんと欲す。

されど茲に注意を要する點は一般物價の騰落と個々物價の騰落との間に於ける差別なりとす。總ての貨物の價格にして騰貴せば、所謂物價指數を以て表示せらるゝ一般物價の平準は高騰す可く。又前者が悉く下落せば後者も低下す可し。然りと雖も物價平準が騰貴せりと總ての貨物の價格は必ずしも騰貴せりと云ふを得ず。又物價平準が下落せりと總ての貨物の價格は必ずしも下落せるには非ざるなり。而して吾人が本項に於て討究せんと欲するは物價平準に對する戦争の影響にして個々の貨物の價格に對する其影響は之を次項に譲らんと欲す。

抑も一般物價の高低換言すれば物價平準が貨幣購買力の反數に外ならざることは本誌に於て喋々するの要なき所なるが、物價平準の昇落を研究するに當りて形式的に論斷する方法と實質的に講究する方法との一を選ばざるべからざるこ



とは特に指摘するを無用とせず。

形式的論斷とは物價が賣買貨物並に授受貨幣並に手形等に依りて終局的の影響を蒙むるものなるを以て、此等貨物、貨幣、手形の數量の増減を調査して物價騰落の原因を推定するを云ひ實質的講究とは此等の數量の裏面に廻りて各其騰落の眞因又は遠因を計究するを云ふ。而して予は本篇に於て後者の方法を探らんと欲するものなり。如何となれば、前者即ち形式的方法は科學的なる點に於て後者に優れりと雖も此方法に依るは單に貨幣數量説を解説するに止まるの結果を呈するのみならず、更に一步を進めて戦争と物價騰貴との間に於ける實質的關係を説明するの要あるを以て也。されば、予は以下形式的説明を省略して一躍實質的講究を試みんと欲す。

戦時物價平準が騰貴するの傾向を有するは重要貨物の需用が比較的増進すると同時に其供給が比較的減退するが爲めなりとす。

戦時に於て需用の激増する貨物の主なるものは云ふ迄もなく政府買上品並に御用船の需用品なりとす。各國政府は平時常に兵器、彈藥、被服、藥品、其他種々の軍需

品の貯藏を怠らず、一朝干戈を動かすことあるも數ヶ月は民間の供給を仰がずして軍事行動を取ることを得るの準備を整へ居れるも、戦争の繼續期間は豫知すること能はざるの常なるを以て、開戦後は軍需品補充の爲め財力の許す範圍内に於て各必需品を購入することを勉む。加之糧食の如きは平時に於て多大の貯蓄を許さざるものなるを以て、此種類に屬する貨物、即ち米、小麦、肉類、罐詰等の需用は開戦と共に激増するに至るなり。軍需品製造の原料に就きて云ふも亦同じ。

次に貨物需用を激増せしむるものは商人の買占なりとす。機敏なる商人は軍需品又は戦争の爲めに供給不足となる可き性質の貨物、即ち輸入品等の騰貴を見越して暴利を貪らんが爲めに此種の貨物を買占むるに至るなり。新紙の報ずる所に據れば歐洲大亂の萌生するや否や一部大阪商人は藥品を買占たりと。是れ即ち其一例なり。又戦時に於ては御用商人、軍人軍屬、海軍根據地並に軍隊通過地の商人の収入増加するが爲めに、此等の階級に屬する人々の需用する貨物の賣行良好となるは自然の數なり。又軍隊の活動目覺しく捷報頻りに來るときは人心を亢奮し一般に奢侈を高進せしめ其結果種々の貨物殊に飲食品の需用を増加せしむるの傾

向あり。

翻つて貨物供給減退の側を見るに、第一吾人は貨物生産其物の減退を擧げざる可からず。貨物の生産が減退するは(一)在郷軍人の召集に基づく生産者の減少(二)軍隊の輸送に依りて蒙むる海陸に於ける原料品運輸の妨害並に原料品の騰貴(三)戦争の影響並に結果に關する懸念より來れる生産業者の手控等を指摘することを得可し。

次に貨物供給減退の一原因としては輸入の減少若しくは杜絶を擧ぐ可きか。今日世界的大戦争に参加せる六大強國中此點に於て最も大なる損害を蒙むりつゝあるは蓋し我國並に獨逸ならん。

又假りに或る交戦國に於ける生産業並に貿易が戦争に依りて何等の影響を蒙むらすとするも、其國內に於ける貨物の供給は軍隊の輸送の爲めに阻害せらるゝに至るを常とす。

戦時に於ける貨物供給の減退は此等技術的原因に依りて誘致せらるゝに止まらずして、物價の騰貴を見越せる商人の賣惜に依りて助勢せらるゝものなりとす。我國の米商洋紙商等は既に其貯藏品を賣放すことを拒絶しつゝありと。以上略論せる外に貨物需用の増加並に貨物供給の減退の原因として指摘し得可きものなきに非ざれども、吾人は以上論じたる所を以て大體の傾向を述ふるに止めんと欲す。

#### 四 個々物價の騰落

前項に於て吾人は戦時中物價平準が騰貴するの原因を略説せしが、本項に於ては戦時に於ける個々物價の騰落に就きて一言せんと欲す。戦時物價平準が高下するを以て常規となすと雖も、總ての貨物の價格は必ずしも騰貴せずして或種の貨物は却つて下落するを常とす。唯平準が騰貴するは騰貴する貨物が下落するものよりも多きが爲めなりとす。

されば、戦時に於ける各種貨物の價格は騰貴するの傾向を有するものと下落するの傾向を有するものとの二種に分つを得可し。騰貴するの傾向を有する貨物の主なるものは(一)軍需品、生産の減退せし貨物、飲食品、輸入品、並に各其代替品等なりとす。輸入品中に於て殊に我國が獨逸並に佛國より從來輸入せしものは暴騰を免

かれざる可し。其重要なる數例を擧ぐれば獨逸より輸入せる染料、毛織絲、紙類、製紙用パルプ、鐵類、機械類、佛國より輸入せる毛織絲、機械類等なる可し。

次に低落の傾向を有する貨物の主なるものとしては戦争の爲め産出の減退せし貨物の原料品並に輸出品にして、殊に今次の大動亂の爲め我國の産物中に於て大打撃を蒙むるは輸出品殊に獨佛兩國に輸出する重要産物即ち屑絲、生絲、銅、羽二重等なる可し。

戰亂に依りて輸入の杜絶又は減退せる貨物に對しては代用品を用ひ以て輸入品の暴騰を幾分か緩和することを得るは勿論なりと雖も、一方に於て代用品の價格が騰貴するに至ることを記憶せざる可からず。又獨佛等に輸出し來りし貨物に對しては中立國に於て販路を求む可しと説く人ありと雖も、一市場を開拓するは容易の業に非ずして、歐洲戰亂終局迄に好成绩を擧ぐることは殆んど不可能なりと云ふを得可し。

### 五 我國の採る可き物價調節策

戰時に於ける物價騰貴に關する諸國の經驗並其原因に就きて以上略述せしが

歴史並に理論に關する研究は將來に於ける吾人の採る可き進路に多少の光明を與ふるに足る時に於てのみ意味を生ずるものなるを以て、吾人は上文に開陳せる愚見を基礎として聊か我國の將さに採る可き物價調節策に就きて一言する所なる可からず。

果して今次の世界的動亂が如何なる影響を我國の物價に及ぼす可きかは青島占領の難易並に歐洲戰況の如何に依りて定まる可き問題にして、軍事に關して門外漢なる吾人の正確に豫想すること能はざるものなるが、假令一般に思惟せらるゝが如く歐洲戰役が本年中に終局を告げ且つ青島が十二月頃迄に占領し得るものなりとするも、我國の物價は多少の影響を蒙むることを免かれざる可く、又從來の經驗より推して其影響は物價平準を多少騰貴せしむるにある可しと思はる。

云ふ迄もなく物價平準の暴騰暴落は絶體的に之を防止するに努めざる可からざるも、至極輕微なる上騰は人心の刺戟の爲めに寧ろ獎勵するを可とすることあり、殊に戰時産業界の消沈せんとせる際に於て然りとす。加ふるに開戰の目的を達する爲めには國民經濟の發展等の如きは時として多少犠牲に供するの已むを得

ざることを以て、物價騰貴を絶體的に防止するを以て必ずしも軍國の一大急務と看做す可からず。而かも此範圍内に於て政府は宜しく物價暴騰の禍根を除くことを怠らず、以て出來得る限り國民の經濟生活に及ぼす軍事の影響を局限せざる可からず。

されば物價騰貴の趨勢を出來る限り緩和する爲に政府の採用す可き方策果して如何、吾人は其第一として海軍の利用並に海上保險の官營若しくは保險金補償制度等に依りて貿易を保護し、輸出入を圓滑ならしむることを推舉せんと欲す。次に軍隊並に軍需品の輸送又は軍艦の行動をして徒らに生産並に運輸を妨害せしめざることに注意を拂ふ可し。又御用商人、軍人、軍屬等に對する支拂の爲めに通貨の膨脹を來すが如きことなからしむるを要す。一時已むなく之が膨脹を誘致せしめたる際には債券、短期借入、其他の方法に依りて速かに増加額を回收するに努めざる可からず。若し政府にして此等の物價調節策を實行せんか、物價騰貴の傾向を幾分か阻止することを得可きは吾人の疑はざる所なりとす。

先月初旬以來商人が買占賣惜を敢行しつゝあるに對して世論漸やく囂々たら

んとせる傾きなきに非ざれども、此等個人商賈に壓迫を加ふるも左して効力なかる可しと思はるゝのみならず、供給の不足せる貨物の人爲的騰貴は其貨物の浪費を防ぎ之を節約せしむるの作用を有するものなるを以て此等商人の營業に積極的干渉を加ふることを避け寧ろ其供給減少の禍根を除去するに努むべきなり。若し夫れ日用品の價格の人爲的暴騰の結果として細民の固窮を來たし斷乎たる救濟手段を講ずるを要するが如きことあらば、當該市町村をして其貨物の實費供給を實行せしむ可きのみ。

以上略述せる所は主として戰爭中に於ける物價の騰落並に物價調節策にして戰爭終局後に於ける物價平準に就きては殆んど何等言及せし所なし。されど後者は前者に劣らざる否な或る點に於て遙かに後者に優れる重大問題なれば、他日機を得て更に之が講究試みんと欲す。

終りに、本篇は本誌の餘白を填むるの目的を以て蒼筦執筆せしものなるを以て不備の點少からざる可きを虞る。此等は識者の叱正を俟ちて他日訂正を施さんと欲す。